

会誌『たつみ』で迎える辰巳会の五十年

(一) 辰巳会の創立

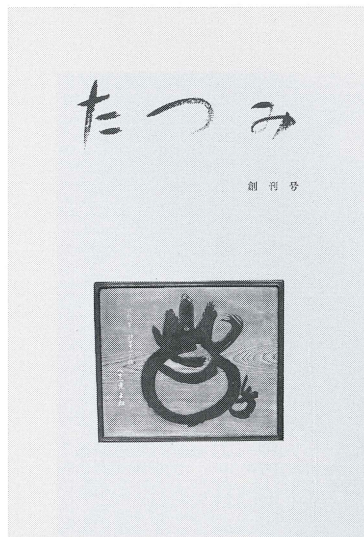
辰巳会は、昭和三十五年十月七日に神戸国際ホテルで発会式が執り行われ、発会した。

辰巳会の誕生にいたることを『たつみ』創刊号で十河一正氏は次の様に述べている。

「―前省略― 昭和三十四年の春のこと、元鈴木商店の貨物課に勤務しておった悪友数名が、神戸平野の翠光園に於いて何十年振りかの会合を催した。その節話題となったのは、この歓喜に溢れた醍醐味を是非共広く全国の同志にも呼びかけることにしてはとの声が高まり、互いに決議することとなった。早速、畑君を伴い宗家たる太陽鉱工に乗り込み、橋本専務にこの事を打ち明けたところ大いに賛同の意を表された。『自分としてもこの計画は多年の懸案で是非実現したく幾度も思っていたが、思うようにその時と人とを得ずそのままになっていた云々』と、

この一言に励まされた私達もまことに微力ながら全力を挙げて同志の為の喜びに邁進することを誓った。次いで大先輩小野氏、旧友の柳田氏を始め、十余名の強力な同志とも図り、昭和三十五年十月七日、神戸国際会館に於いて遂に西日本辰巳会の誕生を見ることになった。翌三十六年四月三日、先輩格たる東京辰巳会とも合併、また各地に支部が発会され―以下省略―」。

辰巳会初代会長・高畑誠一氏は会誌『たつみ』発刊に際して「辰巳会が鈴木が残党の集まりとして呱呱の声をあげたのは今より四年前、光陰矢の如く時は瞬時も待たず進行して、その間旧友多数を失い寂寞の感を深くする。併し人間の命には限りが



鈴木よね筆 宝珠玉屏風 (創刊号)

ある、旧鈴木商店員も四散したが、各自年をとり引退の時機に近づいた人が多くなるにつれて懐旧の情を想起する。我々今尚生き残った会員は余程健康にも恵まれている人で、余生を楽しんで貰いたい。何といっても旧友に会って懐旧談にふける位楽しいものはない。―以下省略する―」。

高畑会長の言葉にあるように、辰巳会は鈴木商店が解散して三十四年の歳月が過ぎたことでの発会からしても、鈴木商店旧友による懐旧を旨とした会であつた。

会誌『たつみ』は辰巳会創立後、約三年半後の昭和三十九年五月に創刊した。創刊号には旧社員の時々の思い出を記す寄稿が多い。

辰巳会大会記念 京都・阿有荘 (昭和37年4月)



辰巳会が全国規模になる少し前、既に東京方面在住者により昭和三十五年に発会している。同年九月に発行した辰巳会名簿によると、幹事住田正一氏、西川政一氏、安東直市氏、松岡俊一氏がされ、個人会員百五十余名であつた。これを契機として西日本辰巳会が会員数三百四十二名で発会している。東京・西日本の辰巳会が発会して間もなくであるが、東西辰巳会会員が合同して集う会を、昭和三十五年十月七日、神戸国際ホテルで開催された。名実共に辰巳会の創立である。当時の会員は北海道から九州まで、鈴木商店及び鈴木商店関係企業に勤務された方々であり、四百五十余名であつた。

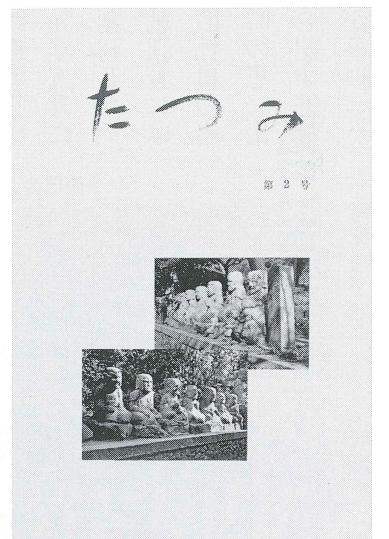
辰巳会の活動は年に数回の会合を開催して会員相互に懐旧とともに懇親を旨とすることである。

創立の約六か月後、昭和三十六年四月三日、神戸オリエンタルホテルで東京辰巳会と西日本辰巳会とが合併の懇親会が開催される。

昭和三十七年四月二日に京都・何有荘で開催された大会には三百人を超える会員の集いになる。この頃からすでに辰巳会の運営では、鈴木商店に関係する企業三十数社による賛助が大いに力になっている。

辰巳会の開催場所は、主に関西地域であるが、同一会場に限定しないことも出席する会員の楽しみであつた。

昭和三十九年五月、会誌『たつみ』を創刊する。会長高畑誠一氏は創刊号に「辰巳会の雑誌発刊により各会員の消息を知り



第2号 鯖大師十六羅漢

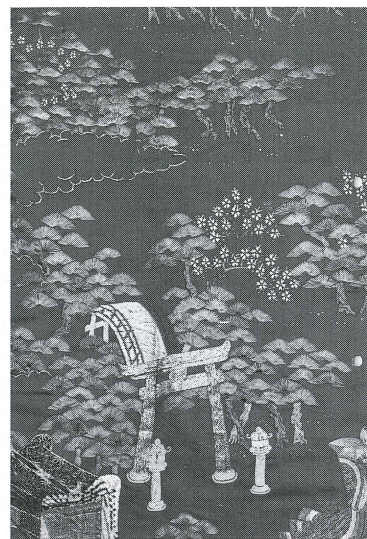
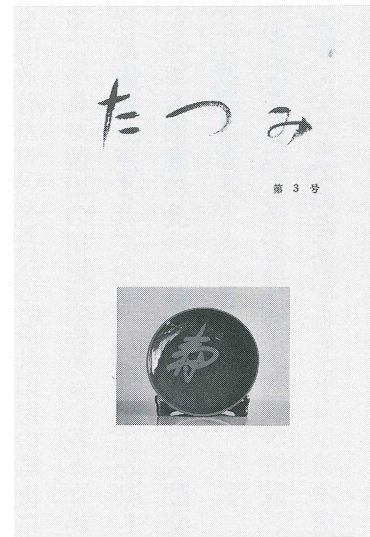
近況を伺い、会合で親密の度を増進したいものである」と述べている。会誌には辰巳会の開催記録が掲載され、昭和三十五年の

創立からの年月日、会場、出席者を知ることができるようになった。また、会員から寄せられる鈴木商店時代の思い出、本・支部の活動、会員趣味の俳句等が主な内容である。

この年、金子直吉翁の二十年祭が、二月二十七日、神戸オリエンタルホテルにおいて執り行われた。柳田義一氏は出席者で「兵庫新聞社社長・木下繁氏（松方金子物語の出版元）、まず立ち金子翁の遺徳を絶賛、次に神戸製鋼所会長・浅田長平氏、いとも厳肅なる面持ちで在世中薫陶を享けられた数々の体験の追憶を語られた。――前後省略――」と記している。辰巳会は会員

長寿大杯

(第3号)



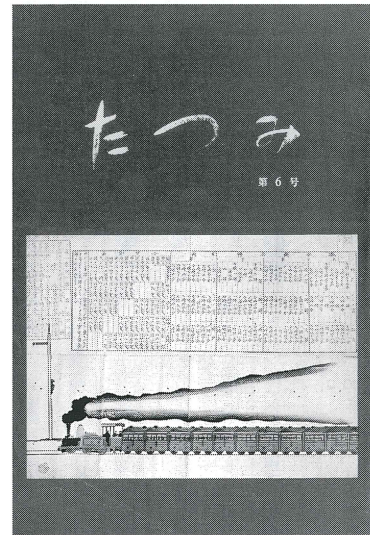
(第5号)

昭和四十一年五月、辰巳会全国大会が開催された。会場の京都嵯峨天竜寺に百七十五名の会員が参集する。当大会に招かれ

た人物がいた。経済ノンフィクション作家の城山三郎氏である。城山氏は昨年来より文学界に鈴木商店を題材とした『鼠』を連載していた。その『鼠』が単行本として出版されたのがこの年である。

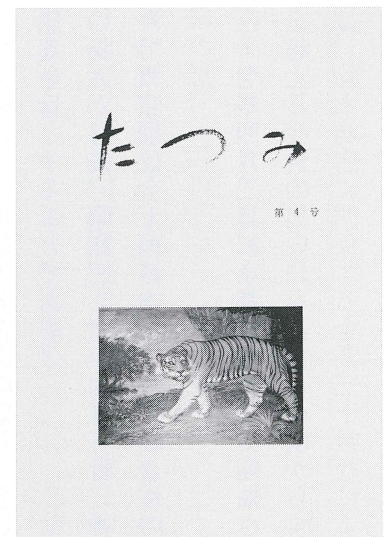
昭和四十年から四十一年は叙勲・褒章を会長高畑誠一氏をはじめとして二十人が受章され、これまでを合わせると四十人に余る会員が受章されている。昭和四十一年一月東京、十一月神戸で受章祝賀会が開催された。

神戸本部に発会していたゴルフ部会は東京支部にも発会し、昭和



国鉄開業当時の時刻表・賃金表 (明治7年5月) (第6号)

の長寿を祝い、昭和三十九年から寿大杯の贈呈を始める。対象となるのは喜寿（七十七歳）を迎えた人で、昭和三十九年までに、明治六年から明治二十一年生まれの方々五十一人に贈り、翌昭和四十年は十八人に寿大杯が贈呈されている。



山本芳翠画『猛虎逍遥』 (第4号) 元鈴木家所蔵が現神戸市立王子動物園に柳田政江氏寄贈

昭和四十年の辰巳会の組織

本部	神戸市生田区京町七十二	クレセントビル
東京支部	太陽鉦工(株)内	会長 高畑誠一
名古屋支部	東京都中央区日本橋江戸橋一―二	支部長 西川政一
四国支部	日商(株)東京支社内	支部長 秋元鷹男
九州支部	名古屋市中区錦一―五―十三	支部長 東条順吉
	日商ビル 中央毛織(株)内	支部長 松本通方
	高知市東唐人町	支部長 木村悌蔵
	北九州市小倉区緑ヶ丘二〇二三	

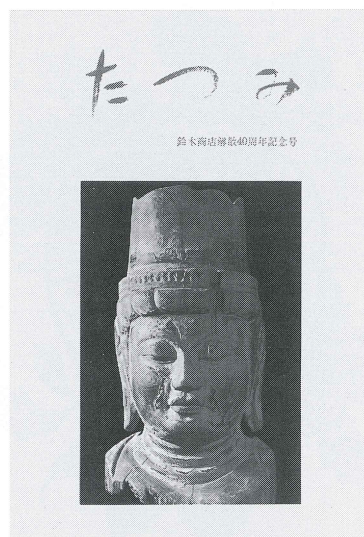
四十年四月二十日に藤沢P・G・Cで第一回が開催された。

(二) 供養塔の建立

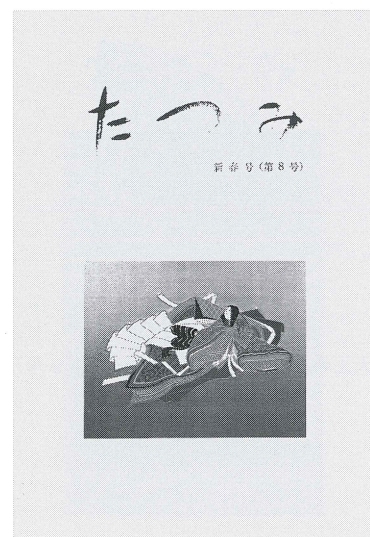
昭和四十二年四月五日、辰巳会全国大会が開催される。大会は鈴木商店解散後四十年が過ぎた記念となる大会になり、会場である神戸市灘区



(第7号)



(第8号)



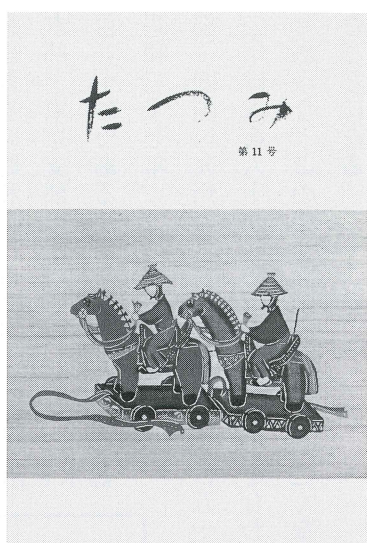
師、一山の衆侶を引見して須弥壇に礼拝愈々、鈴木商店在職物故者の慰霊大法要を執行せられる。豪拓莊重極らない大般若經六百軸の転読奉誦、四百六十五の先亡諸精霊位を呼ぶ導師の声は満堂を圧し肅としてしわぶきもない。やがて高畑会長は除に歩を運んで献花の札を捧げられる。印象的な時が胸に沁み入るように流れた。結修を告げる太鼓の音、こうして法要は滞りなく終った」。

鈴木商店解散四十周年を契機として供養塔建立の動きが加速し、献金は企業団体、個人を合わせて五百六十名に達している。

昭和四十三年四月二日、会員皆の念願であつた供養塔が建立され、除幕式が執り行われる。会長高畑誠一氏は体調優れず参列できなかったが、祝辞を寄せ「本日陽春のよき日を選びまして、鈴木関係故人の慰霊塔を残存者一同の浄財を集めて建設し本日その除幕式を開催されました事は御同慶の至りです。不思議にも四月二日は戦後の記念すべき世界状況、政治経済の大変動の起因記念日にもなる事は御承知の通りです。この日をトとして除幕式を行うのも何かの縁です。残存者も漸減する一方ですが地下にある物故者も、残存者の好意を汲み取られ喜ばれる事と思います。皆様方の御親切に對して感謝されている事と思います。――以下省略――」と述べられた。

供養塔の傍らには板石が設けられ、その碑文は

「辰」鈴木商店解散四十周年に際し其の偉業を偲び物故先覚同僚追慕の念更にあらたなり ここに供養塔を建立し霊とこしえ



(第11号)

を大いに会員にしたい」と言及された。この時、辰巳会創立八年であつた。

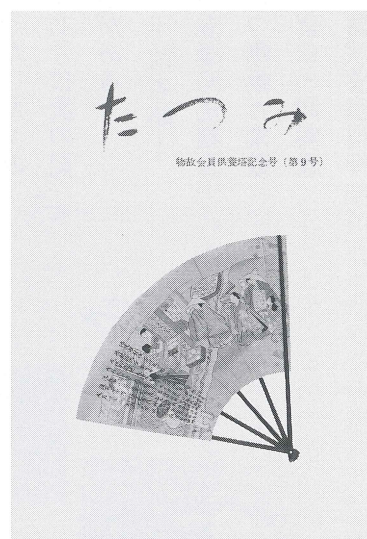
また、昭和四十三年十一月三日に北海道支部

が設立した。同支部は鈴木商店の小樽支店及び函館支店に在職した方で結成した。これで辰巳会の組織は、本部の外、東京・中部・四国・九州に北海道が加わり五支部になり、名実ともに鈴木商店関係者による全国規模の会員組織になる。

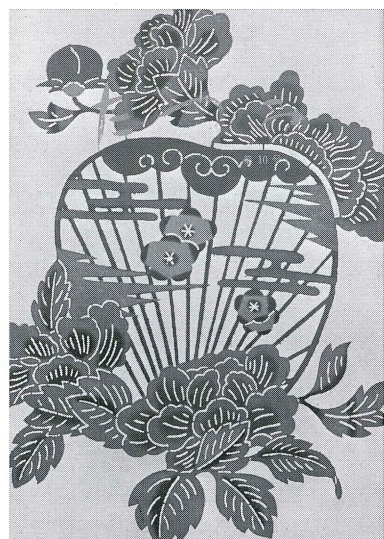
昭和四十四年四月四日、神戸祥龍寺で全国大会と共に、鈴木商店支配人西川文蔵氏の五十回忌の法要が百五十五名の参列のもと執り行われる。

(三) 辰巳会創立十周年

昭和四十五年五月七日、創立十周年を記念する全国大会が開催される。会場となった奈良依水園には、風雨激しい天候にかかわらず二百名余りの会員が集う。大会記には、「――快晴なれば言はずもがな新緑に一きわ冴え渡る奈良市水門町の名園、依



天王寺扇面古写経 (国宝) (第9号)



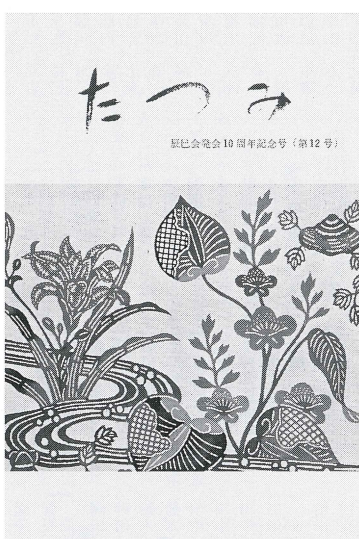
(第10号)

に安かれと祈念するものなり

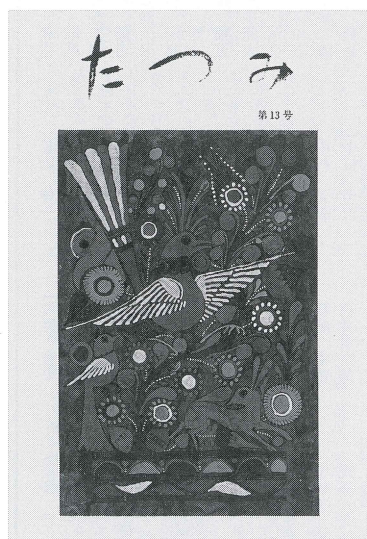
昭和四十三年四月 建立 辰巳会」と彫られている。

供養塔除幕式に参列した日商(株)社長・西川政一氏は挨拶の中で辰巳会の将来を「二世三世をこの辰巳会の会員として、そういう方がどんどんと来て会を賑やかにしてやるという事でなければ、あっちむく人ばかりじゃ困りますので一つこっちむく人

水園に於いてである。――ともあれ辰巳会も茲に創立十周年を迎える事となり、恰もお家様の三十三回忌、岩次郎様(二代目)の二十七回忌の法要を務めさせて頂く事であれば」と記されている。そして神戸祥龍寺の菅宗信禪師による読経で始まり、先に亡くなった諸霊位の読み上げが続ぎ、遺族・鈴木治雄、辰巳会代表・高畑誠一、旧鈴木商店従業員代表・西川政一の三氏が献花の札をされ、引続き米寿を祝う銀盃贈呈、受勲の荣誉



(第12号)



(第13号)